

青丘文庫 月報

No.176

2003年1月1日

図書室 〒650-0017 神戸市中央区楠町 7-2-1 神戸市立中央図書館内

Tel 078-371-3351 相談専用Tel 078-341-6737

編集人 〒657-0064 神戸市灘区山田町 3-1-1 (財)神戸学生青年センター内

飛田 雄一 Tel 078-851-2760 FAX 078-821-5878

郵便振替く00970-0-68837 青丘文庫月報>年間購読料 3000 円

※ 他に、青丘文庫図書購入費として 2000 円/年をお願いします。

ホームページ <http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/sb.html>

あけまして おめでとう ございます。

本年もよろしくお祈いします。

2003年正月

<青丘文庫研究会>

朝鮮近現代史研究会代表 水野直樹

在日朝鮮人運動史研究会関西西部会代表 飛田雄一

第211回 朝鮮近現代史研究会 2002年9月8日(日)

植民地朝鮮で朝鮮語を学んだ日本人 山田寛人

報告では、植民地期の日本人による朝鮮語学習に関する従来の研究の問題点を二点、指摘した。第一に、「日本語強制」、「朝鮮語抹殺」といった言説が実態をそのまま示すものとして語られてきた点。そのために、日本人が朝鮮語など学んでいたはずがないというイメージが作られた。第二に、日本人が朝鮮語を学んだことは認めながらも、それが支配を円滑に進めるための特殊な目的によるものにすぎず、その規模も大したものではなかったとされてきた点。植民地権力側の政策意図がそこにあったことは事実だが、それが政策側の言説のみにもとづいた評価であるために、学習奨励の実態が詳細に検討されることがあまりなかった。

以上の二点が問題であると考えるのは、日本人が朝鮮語を学ぶことは「よい」こと、日本人が朝鮮人に日本語を教えることは「わるい」こと、或いは、植民地期の日本人による朝鮮語学習を「遠い世界」の「遠い過去」のものにとらえて「戦前」の朝鮮語学習は「わるい」こと、現在の朝鮮語学習は「よい」こと、というように単純に図式化して把握することにつながりかねないからである。

総督府による朝鮮語奨励政策は、教員、警察官、金融組合理事などに対するものの実態を検討すると、時期によっては実質的にほぼ全員が学習しなければならない制度が実施されており、「奨励」というよりも「義務」に近い面もあったことがわかった。したがって、学習者自身の意識も、就職や昇進のため、あるいは官公吏等の義務として学ぶというものだった。また、朝鮮語の能力は、職務を効率的にこなすというほどの水準に達する者は少

なかったものの、片言の朝鮮語であっても朝鮮人から親しみをもたれるなどの効果はあった。

さらに報告の最後に、植民地期の「日本語強制」の実態をどうとらえるのかについても以下のような提言をした。日本語で教育を行う普通学校への就学率が高まったことや、戦後、日本に戻った元教員が多くの朝鮮人生徒から親しまれ交流をしている事実は、当時、表面的には「自主的」に日本語を学ぶ朝鮮人がいたことを示唆している。こうした事実を無視するのではなく、こうした構造を問題にする視点が必要だろう。

第244回 在日朝鮮人運動史研究会関西部会11月10日(日)

戦前および占領期の大阪市における在日朝鮮人に関する地理学的研究

福本 拓(京都大学・院生)

本研究の視角は、次の二点を主要な論点に据える。すなわち、①皇民化政策といった日本独自のコンテクストにおけるエスニック集団研究を行うこと、②「在日朝鮮人」というカテゴリー形成に果たした都市政治権力の役割に着目し、かつ集住地との関連からその過程を検証すること、である。具体的には、戦前・占領期の大阪市を対象に、人口動態と行政当局・警察の在日朝鮮人観の関連を考察する。本研究は、人口の基礎データの構築と、幅広い視点からの研究による、既存の個性記述的研究の統合的理解の促進という二点で、在日朝鮮人史研究に一定の貢献があると思われる。

まず戦前の集住地の形成・変遷について、工業を中心とする経済的要因から検討する。当時の在日朝鮮人の多くが中小工場に就業していたが、統計資料からは、これらの工場には相対的な規模の差があったことがわかる。そしてこの相対的な規模の差が、集住地間に地域差を生み出しており、このような地域差は特定の地域(生野・東成)に自営業者層が出現させるに至った。例えばゴム工業のように、自営業者層の成長は、特定の地域に在日朝鮮人を中心とした地域経済を形成することに繋がった。さらにこのことは、集住地間に定着性という面でも地域差を生み出したといえる。次に、この人口動態が、都市政治権力を主体とする融和政策の展開にどのように影響を与えたかを議論する。その際、融和政策の前提として、(1)朝鮮人⇄近代化(2)朝鮮人⇄日本人=近代化(3)朝鮮人=危険視=治安管理的対象、という政治権力の在日朝鮮人観・図式が存在したことに言及し、集住地が融和政策の主要な対象となっていること、及び集住地の地域差が在日朝鮮人観にも影響を与えていたことを指摘する。

占領期には引揚の結果在日朝鮮人人口は大幅に減少したものの、大阪市における集住地の解消・存続は一様なものではなかった。空襲の影響が大きかった地域の集住地は解体された一方で、その影響が小さかった地域では、戦前に形成された集住地間の地域差、特に定着性の差によって消滅ないし存続した。占領期には上述した三つの在日朝鮮人観のうち危険視的なものが卓越し、占領政策に違反しているという側面が強調された。さらにこのような在日朝鮮人観には、存続した集住地の特性が表象されていた。

最後に、戦前から占領期にかけての在日朝鮮人観の変遷について考察し、主に二つの要因がこの変遷に関わっていたことを述べる。第一に、終戦と共に皇民化を基軸とする在日朝鮮人管理体制は崩壊し、警察が表立って治安維持を理由に在日朝鮮人を管理できなかった中で、警察は占領政策に違反する存在としての在日朝鮮人像を強調し、占領軍のオーソリティを利用することで、再び彼らを管理下に置こうと画策していた。第二に、在日朝鮮人を戦前と同じく徹底して管理しその成果を挙げることで、警察が戦後失墜したその権威を回復させようとしていた。

●新聞記事再録／神戸新聞／2002.12.2●

(第3種郵便物認可)

2002.12.2

神戸新聞

不申

戦時下、朝鮮語貫き獄中死 詩人・尹東柱に共感

第二次大戦中、使用を禁じられた朝鮮語で母国への思いを詩に書き続けた尹東柱(ユン・ドンジュ)の作品に、牧師川上盾さん(カミガモタカ)が神戸市東灘区御影町Ⅱが曲をつけて歌い、CDを制作した。尹東柱は、朝鮮の独立運動を企てたとして治安維持法違反で逮捕され獄死したが、韓国では戦後、教科書に紹介される国民的詩人となった。川上さんは「日本語で書けば生き延びる道があるのを知りながら拒んだ。『本当に生きる』とはどういうことか、考えさせられた」という。

(宮沢之祐)



尹東柱 (三五館発行「星うたう詩人」から)

自由への叫び、曲に乗せ

「隣国との歴史知って」 神戸の牧師、CD化



ギターを弾きながら歌う川上さん—神戸市東灘区御影町

日本の植民地支配下時代、朝鮮半島にいた尹東柱は、言葉の統制が強化される中、母国の暮らしや風景を題材に朝鮮語での詩作を続けた。独立運動の疑いで逮捕されたのは、同志社大学文学部英文科で学んでいた一九四三年のことだった。翌年二月、福岡刑務所で何か叫んで息絶え、毒殺の疑いもあるという。二十九歳だった。

没後五十年となる九五年、同志社大に詩碑ができるのをきつかけに、川上さんは作品を知り、感動した。「死ぬ日まで天(そら)をおおき／一点の恥することなきを／葉あいを縫いそよぐ風にも／わたしは心痛めた」。

教会を拠点にゴスペル・グループを主宰している川上さんは「ゴスペルは、抑圧されたい歴史があることも知って60

た黒人の自由を求める叫び。収録し、表題作「死ぬ日まで尹東柱の詩にも同じ叫びを感じた」。代表作にバラード調の両方を収めた。希望者にはなどの曲をつけ、集金などでカンパ千円で配る。

来年一月十日午後六時半、同市灘区山田町三の神戸学生青年センターでCD発行記念の音楽と講演の夕べが開かれ、参加費千五百円。同センター ☎078・851・27

